

連載

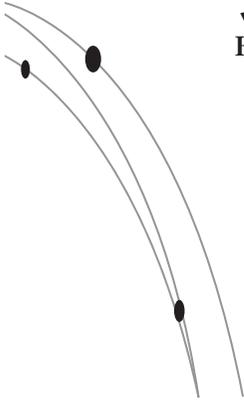
フィールド・アイ Field Eye

イタリアから——②

イタリア国立ベルガモ大学

河合 憲史

Norifumi Kawai



イタリア高等教育システムについて

連載第2回目の今回はイタリア高等教育システムと教育環境、そしてそれらを前提とした大学教員の業務内容について簡単に紹介してみたい。

イタリア高等教育システム

イタリアの高等教育システムは、制度的および機能的に異なる2つの大きなセクターに分割されたバイナリシステムとなっている。つまり大学セクターと美術、音楽、ダンスのための高等教育セクターに分けられる。ここでは前者にフォーカスして紹介していきたい。イタリアの大学システムは、①国立大学（例 私が所属するベルガモ大学）、②私立大学（例 ボッコニ大学）、③オンライン大学、④特別認可を受けた高等教育機関で構成されている。イタリアの大学システムは基本的に3年間のラウレア学位コース（Laurea）、2年間の専門学位コース（Laurea Magistrale）、そして研究3年間のドクター課程コース（Dottorato di Ricerca）の3つのコースで構成されており、これらのコースはすべて単位制（CFU）を採用している。1単位は個人学習、講義、試験を含む合計25時間の学習に相当し、学士号にあたるラウレア学位を取得するためには合計180単位が必要となる。通常、フルタイムの学生は1年間に60単位を取得することが義務付けられている。CFUシステムはヨーロッパ・クレジット互換システム（ECTS）システムに対応している。各学位コースの教育内容は、各大学が自主的に定めているが、国レベルで定められた一定の教育活動（およびそれに相応する単位数）を含めることが義務

付けられている。イタリアでは大学の資格は教育課程を履修し、かつ試験に合格して学業を修めた者にそれぞれ異なる称号を授与している。学士号（ラウレア学位コース）では、「ドットーレ」の称号が授与され、修士号（専門学位コース）は「ドットーレ・マジストラレ」が授与される。そして研究博士号（ドクター課程コース）は「ドットーレ・ディ・リチェルカ」の称号が授与される。ドイツで博士号を取得した私がここで驚いたのはイタリアの学部卒に授与される「ドットーレ」という称号である。ドイツでは博士号を「ドクター（Doktor）」と呼ぶのが普通である。イタリアに来た当初は「ドットーレ」と「ドクター」の発音がかなり似ていることもあり、あらゆる職位のイタリア人の名刺を見る度に、氏名の前に「Dott.」という肩書がついており、イタリアには高学歴の人がかなり多いと勝手に思い込んでしまった。つまり、イタリアでは最初の3年を修了しただけで「ドットーレ（大卒）」の肩書が使えるのである。ただ、ここで忘れてはならないことは日本とは比較にならないほどイタリアでは大学を卒業することが容易ではないという現実である。大学や分野によって異なるが、私が耳にしたのは卒業できるのは20~30%くらいと言われている。イタリアの大学では入学後、分野にもよるが学生は教授との質疑応答形式の口頭試験、講義前の予習、レポート提出、個人・グループでのプレゼンテーション、筆記試験（中間と期末）等を行い、すべての教科において合格点に到達し単位を修得して漸く卒業できる。日本と異なるのは一定の制限はあるものの、学生は試験結果に納得いくまで何度でも試験を受けられることである。教員側からすると、この制度はあまり好ましくないというのが本音であるが……。なお、試験は30点満点で採点をするのが基本となっている。また、日本のように上位〇%の学生にのみ優秀（A）を付与しなければならないというルールはイタリアには存在せず、学生のアカデミック・パフォーマンスがよいと判断できるのであれば教員の裁量で満点を何人にでも出すことができる。その他に特筆すべき点は日本の大学と違い、イタリアの大学の授業料はかなり低額に抑えられていることだろう。その背景には教育機会の平等化を重要視しているイタリアの教育理念がある。国立大学の学士号レベルであれば為替レートの変動にもよるが、年間の学費は約30万~40万円と言われている（私立大学や医学部の場合、学費は高めに設定されて

いる)。加えて、学費を家庭の収入によって段階的に免除する制度もあり、学費の免除額はISEEと呼ばれる家庭所得証明によって正式に決定される。例えば、私が所属しているイタリア国立ベルガモ大学が提供しているマネジメント・コースの場合、今年度の学費は家庭の所得レベルにより200ユーロから2400ユーロ前後の幅になっている。

学生の授業に対する態度

学士号レベルの学生はほぼイタリア人と言っても過言ではない。修士課程に関して言えば、もちろん、イタリア人が過半数を占めるものささまざまな国からの学生も数多く在籍している。昨年度、私が担当したInternational Business & Tradeという修士課程のクラスにはイタリア、イギリス、フランス、メキシコ、イラン、ベトナム等の国々から来た学生が参加していた。学生の授業中の態度は、日本の大学生よりはるかに真剣であり、教授陣に対して常に敬意を払っているように感じる。日本の学生のように教室の後ろに座り、スマホをいじる学生は私の授業では皆無であり、逆に熱心に講義を聞きながら、とにかく多くの情報を得ようと必死でノートをとっているのが率直な印象である。授業中に発言が求められる場合、積極的に議論に参加する学生がとても多いように思う。もちろん、教員のみが一方的に講義をし、黙って授業を聞いている受動的な講義も存在している。私の授業では事前に難易度の高い学術論文2~3本を深く読んで参加しなければならぬが、読まずに参加する学生はほぼいないと言ってもいい。授業終了後も多くの学生が講義内容に関して、とても鋭い質問をしてくることは日本とは大きく異なる。

教育の国際化

近年、イタリアでは、イタリア国内と海外の2つの学位を取得できる国際ダブル・ディグリー・プログラムを導入し、グローバル化を目指した教育を実践する大学が増加している。たとえば、私が所属するベルガモ大学企業科学学部の場合、英国ダンディー大学ビジ

ネススクールとのダブル学位協定に基づき、修士課程の学生は2年目に英国のパートナー大学の「会計と財務」の修士号コースを履修できる。両大学のコースを修了した学生は最終的にベルガモ大学の「経営管理(会計、説明責任、ガバナンス)」の修士号とダンディー大学の「会計と財務」の修士号の両方のダブル・ディグリーを取得することできる。毎月開催される教授会でも国際ダブル・ディグリー・プログラムを更に充実させるためパートナー大学の選定や交渉方法が度々議論されることから、国境を越えた相互交流の活性化や国際社会をリードする人材育成を重要視する傾向にあることが窺える。また、「教育・研究の国際化」や「国際的なプレゼンスの向上」という視点から、国際的な教育品質評価機関から国際認証の資格を取得すべきかどうかという議論も教授会の中で盛んに行われている。

大学教授の業務

大学教授の業務内容に着目してみると、イタリアと日本では格段の差があると感じる。たとえば、イタリアの大学では大学教員が高校訪問、オープンキャンパス、入試問題作成、試験監督のような業務に関わることは全くないため、講義や研究活動に集中できるシステムが整備されている。私が着任して以来、割り当てられた業務は海外から修士コースに応募してくる候補者の選考の一環として、20人くらいに対してZoomで簡単なインタビューを英語で各10分くらい実施し、その結果をコース・ダイレクターに共有するくらいである。こちらに来て痛感することは大学教員には質の高い講義と研究に励むことが強く期待されているということである。

かわい・のりふみ イタリア国立ベルガモ大学企業科学学部准教授。最近の主な論文にKawai, N. and Chung, C. (2019) "Expatriate Utilization, Subsidiary Knowledge Creation and Performance: The Moderating Role of Subsidiary Strategic Context," *Journal of World Business*, Vol. 54, No. 1, pp. 24-36. グローバル戦略論, 国際人的資源管理論, アントレプレナーシップ論専攻。